



『なに不足 ^{よそく} みんな裸で ^{はだか} 生まれたに』

上の婆さんは「奪衣婆(だつえば)」とか「葬頭河婆さん(そうづかばあさん)」と言うんじゃ。人は死ぬと十日ほどで三途の川(さんずのかわ)に到着するそう。三途とは地獄・餓鬼・畜生の三悪道のことじゃが、冥途(めいど)の旅ではこの川をどうしても渡らにゃならん。功德を積んだ善人は橋を歩いて渡るし、罪の浅いものは流れのゆるやかな浅瀬を渡れるが、罪深い者は濁流に突き落とされ、しかも川上から巨岩が押し寄せて罪人の五体を打ち砕く、そんなところを渡らにゃならんそう。前世の善業・悪業に応じた瀬を渡らにゃならんのじゃよ。さてこの婆さんじゃが、三途の川岸で懸衣翁(けんねおう)という爺さんと住んどるんじゃ。婆さんは死人の着物を無理やりにはぎ取っては爺さんに渡し、爺さんがそれを衣領樹(えりょうじゅ)という木の枝に引っ掛けると、死者の生前の罪の軽重がその枝の垂れ方に表れてしまうのじゃ。そしてそれが三途の川のうち、どこを渡らねばならんのかが決められてしまうんじゃと。しかもこの爺・婆は死後三十五日目の閻魔大王(えんまだいおう)さまによる死者への裁判に、陪席しているもんじゃで、嘘の申告は出来ねえことになっておるんじゃ。オ～こわっ！ じゃがこの婆さん、咳止めや疫病除けのご利益もあるげなぞ…

衣服は欲望を表わし、それが重ければ重いほど罪も重くなるという訳です。正光寺の本堂の入り口で婆さんが待っていますので、お参りの時には欲望を軽くしてからご入堂下さいね。実はこれ、冥途の旅のおけいこなんですよ。

『十王経』にみる私たちの死後のスケジュール（その1）

十王経はインドの古代の宗教、中国の道教や儒教、はたまた遠くペルシア(イラン)のゾロアスター教(拝火教)などの思想が融合して渡来したものが、さらに日本風アレンジされて長く信仰されたものでした。十王とは亡者の生前を裁き、来世の審判を行う裁判官的な尊格ですが、人間などすべての生き物は、よほどの善人やよほどの悪人でない限り、没後の初七日から 七七日(四十九日)及び百か日、一周忌、三回忌までには、順次十王の裁きを受けて生まれ変わる所が決せられるという信仰です。そしてそこには生前の善行悪行はもちろん、生き残った者による追善供養の大切さも説かれています。数回に分けて解説していきますので、しばらくお付き合い下さい。取りあえず今回は概略です。



死後忌日	十王名	本地仏	取 調 べ 内 容
初七日	秦広王	不動明王	物や生き物の命を粗末にしなかったか(殺生)
二・七日	初江王	釈迦牟尼如来	盗んだり奪ったりしなかったか(偷盗)
三・七日	宗帝王	文殊菩薩	乱れた性や飲酒はなかったか(邪淫・飲酒)
四・七日	五官王	普賢菩薩	嘘や偽りを語ることはなかったか(妄語)
五・七日	閻魔大王	地蔵菩薩	六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上)の行先判定
六・七日	變成王	弥勒菩薩	生まれ変わる場所の条件審判
四十九日	泰山王	薬師如来	生まれ変わる本人の条件審判
百ヶ日	平等王	観音菩薩	再審(本人の行状と遺族の追善供養)
一周忌	都市王	勢至菩薩	再々審(")
三回忌	五道転輪王	阿弥陀如来	再々々審(")